

平成 23 年度公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

## 完了報告書

軽症脳卒中患者のための脳卒中ノート（地域連携パス）開発  
—急性期病院からの取り組み—

平成 24 年 2 月 29 日

主任研究者

馬場みちえ

福岡大学医学部看護学科 准教授

〒814-0180 福岡市城南区七隈 7-45-1

共同研究者

坪井義夫 福岡大学医学部神経内科学教室 教授

津川 潤 福岡大学医学部神経内科学教室 助教

大倉美鶴 日本赤十字九州国際看護大学 准教授

# 軽症脳卒中患者のための脳卒中ノート（地域連携パス）開発

## —急性期病院からの取り組み—

### 1. 目的

本研究の目的は、軽症脳卒中患者が急性期病院を退院後、地域医療連携パスの発想があるオリジナルな「脳卒中ノート」を開発し、地域連携支援の基礎資料を構築することである。多施設、多職種の関係者で患者の情報共有が可能となることと、本人の自己管理要素を併せもつことで脳卒中の再発防止、重症化防止が期待される。

### 2. 背景

我が国の脳卒中における死亡率は低下してきたが、人口の高齢化とともに総患者数は増加している<sup>1)</sup>。脳卒中に罹患すると脳に気質的なダメージを与え、死亡に至らずとも心身ともに麻痺や障害が残る重要な疾患である。脳梗塞治療である t-PA 療法の啓蒙によって、最近軽症のうちに病院受診する人が多くなった。また降圧療法の普及によって軽症脳卒中が増加しており、約 50%が軽症脳卒中といわれている。主任研究者らは、昨年福大病院神経内科に脳卒中の保存的治療を目的に入院した脳卒中患者の診療録を後方視的に追跡した。その結果 2 年間 162 人の患者平均年齢は 68.4 歳、脳卒中病型は脳梗塞 90%、初発患者が 94%であった。入院時は救急車搬送であっても退院時の厚生労働省障害老人の日常生活自立度で寝たきりを示す B、C ランクが 33%であり、ほとんどの人が歩行退院へと改善していた。退院先は自宅が 74 人(45.7%)で増加傾向にあった。若くて初回の発症で軽症脳卒中の患者が多いという結果であった<sup>2)</sup>。脳卒中再発率を Hisayama study でみると脳梗塞発症から 1 年後に 10.0%、5 年後 34.1%、10 年後 49.7%が再発したと報告されており、再発率は高かった。

以上のことから、最近の脳卒中は軽症脳卒中が多くなっており、急性期病院から自宅退院する人が多い。しかし再発率は高いことから、十分な脳卒中管理方法の構築が必要である<sup>3)</sup>。

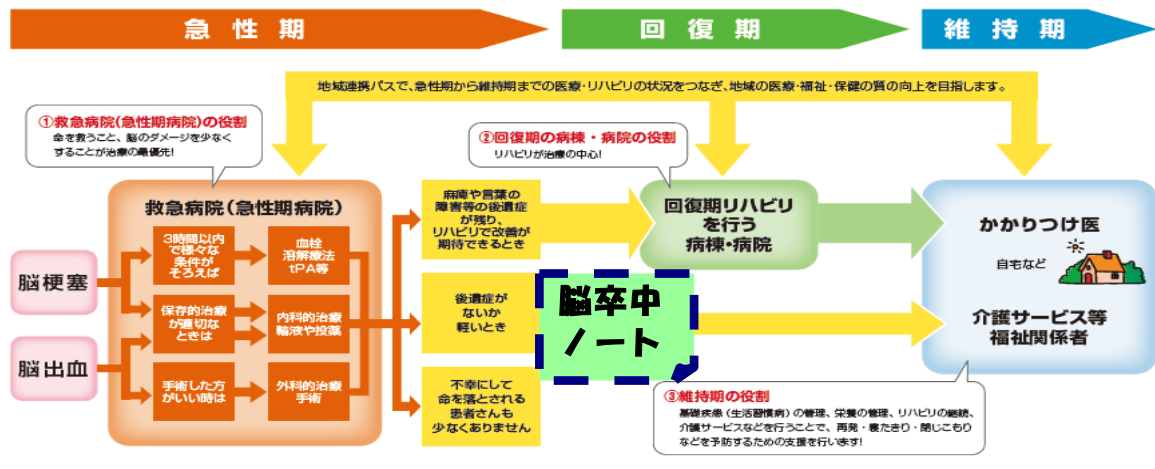
### 3. 「脳卒中ノート」に期待される成果<sup>4)</sup>

急性期病院から自宅退院が多いことから、急性期病院での診療情報が地域のかかりつけ医へと確実に伝わるのが重要となってくる。情報を的確に素早く伝達できれば、早期発見、早期治療できると同時に重篤な発作を未然に予防することができると思われる。また、脳卒中再発の原因として、本人自身による定期的な受診状況や日常生活習慣の影響も大きい。患者自身によって治療継続の必要性、リハビリの重要性、日常生活習慣改善を意識化できることで脳卒中再発率の低下が見込まれる。

#### 4. 「脳卒中ノート」 開発工程

##### 1) 独創的な点

###### (1) 急性期病院からかかりつけ医との連携



現在脳卒中地域連携パスは医療機関やチーム医療のスタッフ間で連携しているものが多い<sup>5)</sup>。しかし脳卒中は、重篤度によりパスが多岐にわたるため複雑なパスが多数存在している。病院連携のパスはあるが、地域のかかりつけ医との連携、患者本人参加の視点は少なかった。

###### (2) 行動変容理論からみた生活習慣改善の機会

病気になるということは患者にとってある種の規律の無秩序状態の体験を指すといわれている。病気になった時には自分の生活習慣を改善する好機であるともいえる<sup>6)</sup>。それは Prochaska のステージモデルでも説明され、健康的な行動変容が可能になる「実践期」あるいは「関心期」に位置している<sup>7) 8)</sup>。他にもスモールステップ法や認知行動療法など行動変容理論も考慮して作成された。

###### (3) 患者自身による情報マネジメント

軽症脳卒中患者は、初回脳卒中であることが多く、発症前に医療機関を定期的受診しておらず、かかりつけ医を持っていないことが多い。また日本では医療機関へのフリーアクセスの制度があるため、紹介状を持っていった医療機関で必ずしも継続して受診をするとは限らない。そうすると脳卒中発症時の診療情報は次の医療機関で診療に活かさないことになる。

###### (4) 患者へのノート配布

脳卒中患者の診療情報を掲載したことで地域かかりつけ医との連携が密に図れるように記載した。地域連携パスが患者自身によって機能的に有機的に図れると考えられる。

###### (4) 個人情報管理

「脳卒中ノート」は自身の情報を自己管理するため、コンピューターによる情報漏洩や本人の了解なく他者に見られることはない個人情報保護の利点も考えられた。

また、脳卒中ガイドラインによると、脳卒中患者・家族や医療側からの再発予防に関する情報を希望しており、疾患に関する小冊子などの配布は有意に効果的であったことが報告されていた<sup>9)</sup>。

## 2) 「脳卒中ノート」開発方法

### (1) 情報収集 文献およびホームページ検索・情報収集

#### ①脳卒中ノート

参考文献 1)～23)

#### ②地域連携パスの考え方

参考文献 24)～32)

ホームページ 参考文献の 33)～39)

### (2) 脳卒中ノートの内容検討、印刷工程

研究会議の開催

(10回、4/28, 5/20, 6/30, 7/14, 8/1, 9/2, 9/8, 9/22, 10/27, 1/26)

情報の共有、情報の検討、役割分担

執筆分担、原稿検討、まとめ

スケジュール、ノート開発の工程表検討

### (3) 脳卒中ノートのデザイン検討

現在出版されている脳卒中関連の本を参考にデザインを情報収集

著作権に考慮するために印刷会社との検討し、

オリジナルの図、表を作成した。

### (4) 患者意見

軽症脳卒中患者に退院支援の中で必要なパンフレットや説明資料を作成し、生活指導を行った。その時に患者の意見を聞き、参考にした。

### (5) 「脳卒中ノート」説明マニュアルの作成

## 5. 地域連携支援パスとの整合性

脳卒中は、2006年の医療制度改革で在宅生活への早期復帰をめざすことが盛り込まれ、2008年の診療報酬改定では脳卒中診療が重要視されるようになった。脳卒中の地域連携診療計画、すなわち脳卒中地域連携パスに対する地域連携診療計画管理料と地域連携診療計画退院時指導料が認められた。これにより全国に脳卒中地域連携パスの活用が浸透していった。そのため全国各地の脳卒中地域連携パスをホームページでみることができ、福岡県や福岡市においても情報開示されていた。

それらを参考に検討した結果、多くの脳卒中地域連携パスで、急性期病院、回復期病院、かかりつけ医との連携、医療施設、介護施設、在宅関連など施設間で患者を中心として電子バージョンで患者情報のやりとりが行われていた。脳卒中は、脳での障害がおこった部

位によって症状や障害の幅があり、診療やリハビリの情報が大きく異なる。そのため、脳卒中患者の情報を各医療機関、医療チームで情報が共有することが重要であり、そのことによって転院がスムーズになり、医療やリハビリが継続できるようになっていた。しかし軽症脳卒中患者で、急性期病院からかかりつけ医へのパスはほとんどみあたらなかった。

地域連携パスを活用することで、患者の QOL 向上はもちろん、入院日数の減少、機能予後の改善、合併症予防に有効であったと報告があり、医療費の逓減にも役立つと考えられた<sup>9)</sup>。

## 6. まとめ

現在の急性期病院での脳卒中は、半数が軽症であり自宅へ退院している。しかし、初回が軽症であったとしても脳卒中は再発率が高いうえに、脳卒中が再発後は重症になりやすい。そのために脳卒中地域連携パス機能が重要であるが、再発時に受診した医療機関で、患者情報について迅速かつ正確に情報が得られるとは限らない。そのため、急性期病院からかかりつけ医へと情報伝達できる方法が必要と考え、「脳卒中ノート」を開発した。

「脳卒中ノート」は自己管理要素もありながら、再発防止に向けた地域連携パスとして重要な役割を果たすことができることが期待される。今後運用しながら、さらに使いやすいノート、使ってもらえるノートへの追究を課題としたい。

## 7. 謝辞

本研究は公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成により行った。

## 8. 引用文献

- 1)厚生労働統計協会、国民衛生の動向 2011/2012、厚生労働統計協会、2011
- 2)馬場みちえ、坪井義夫、梅本丈二、渡邊淳子、津川潤、北嶋哲郎、喜久田 利弘、福岡大学病院神経内科における脳卒中急性期患者の嚥下障害有無と日常生活自立度の回復状況と食事開始状況—2007年4月～2009年3月診療録から後方視的実態の検討—、福岡大学医学紀要 2010、38(1)、39-45
- 3)岡田靖、21世紀の医療連携-脳血管障害の地域医療連携、Clinician 2008、573 ; 1133-1140
- 4)長束一行、脳卒中ノート—豊能方式、治療増刊号 2008、90 ; 850-857
- 5)日本リハビリテーション医学会編.脳卒中リハビリテーション連携パス—基本と実践のポイント.医学書院.東京.2007
- 6)宗像恒次、最新 行動科学からみた健康と病気、メヂカルフレンド社、2005
- 7) Prochaska J.O., Velicer W.F. The transtheoretical model of health behavior change. American Journal of Health Promotion 1997, 12(1);38 - 48

- 8) 松原千明、医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎、医歯薬出版、2002
- 9) 篠原幸人、脳卒中治療ガイドライン 2009、協和企画、2010

## 9. 参考文献

- 1) 篠原幸人、脳梗塞と脳出血、主婦の友社、2004
- 2) 厚東篤生、荒木信夫、高木誠、脳卒中ビジュアルテキスト 第3版、医学書院、2008
- 3) 馬場元毅、絵でみる脳と神経 第3版—しくみと障害のメカニズム、医学書院、2009
- 4) 福井圀彦、脳卒中最前線 第4版—急性期の診断からリハビリテーションまで、医歯薬出版、2009
- 5) 田中耕太郎、高嶋修太郎、必携 脳卒中ガイドブック、診断と治療社、2008
- 6) 林裕子、自立生活を回復させるニューロリハビリ看護、メディカ出版、2009
- 7) 内山真一郎、脳卒中テキスト 正しい知識と治療・管理、南山堂、2005
- 8) 高木誠、脳梗塞はこうして防ぐ、治す、講談社、2005
- 9) 中込忠好、脳出血・くも膜下出血はこうして防ぐ、治す、講談社、2006
- 10) 中山博文、脳卒中になったその日から開く本（病後・手術後の過ごし方シリーズ）、保健同人社、2009
- 11) 黒田栄史、岡安裕之、脳梗塞—最新治療&リハビリガイド（聖路加国際病院健康講座）、双葉社、2004
- 12) 木村彰男、図解 脳卒中のリハビリと生活—より質の高い暮らし（QOL）のために、主婦と生活社、2008
- 13) 渡辺一正、再起する脳 脳梗塞が改善した日、幻冬舎ルネッサンス、2010
- 14) 市川衛、NHKスペシャル 脳がよみがえる 脳卒中・リハビリ革命、主婦と生活社、2011
- 15) 橋本洋一郎、岡田靖、矢坂正弘、脳卒中の再発を防ぐ！知っておきたいQ&A76、南山堂、2009
- 16) 厚東篤生、ホームメディカ安心ガイド「脳梗塞」これで安心早期発見・早期治療と予防のために、小学館
- 17) 篠原幸人、脳梗塞脳出血クモ膜下出血が心配な人の本、脳血管の病気の不安解消 予防・早期発見のために、法研
- 18) 高木誠、新版脳梗塞・脳出血くも膜下出血 もやもや病、慢性硬膜下血腫、脳動脈解離ほか、主婦の友社、2009
- 19) 大田仁史、脳卒中後の生活 元気になる暮らしのヒント 同病の先輩から後輩へ、創元社、2005
- 20) 帯津良一他、自分で防ぐ・治す脳梗塞 前触れをキャッチ。自然治癒力を高めて後遺症を克服！、法研、2007
- 21) 木村彰男、より質の高い暮らし（QOL）のために 脳卒中のリハビリと生活、主婦と生活社、2008
- 22) 内山真一郎、別冊NHKきょうの健康 脳卒中 見逃さない、あきらめない、NHK出版、2010
- 23) 日本脳卒中協会福岡県支部、脳卒中を予防するための10か条と大切なお話、日本脳卒中協会、2010
- 24) 岡田晋吾、地域連携パスの作成術・活用術 診療ネットワーク作りをめざして、医学書院
- 25) 福島道子、河野順子、入院時から始める退院支援調整 医療機能分化・連携の推進に対応する実践ガイド、日総研
- 26) 小林祥泰、脳卒中データバンクの生い立ちと今後、脳卒中 2009、31(6)；395-403
- 27) 中馬孝容、脳卒中リハビリテーションはここまできた、成人病と生活習慣病 2009、41(2)；240-249
- 28) 竹川英宏、新島悠子、小川知宏、大門康寿、江幡敦子、相場彩子、岩波正興、平田幸一、病院前脳

- 卒中診療ネットワーク 脳卒中診療ネットワーク（1）栃木県、ICUとCCU ヴ vol.32(5)2008;357-361
- 29) 三池裕美子、地域連携パス対象外の脳卒中患者の退院支援の現状、BRAIN NURSING、2011 vol.27 no.7(721);73-77
- 30) 門祐輔、近藤克則、急性期から回復期リハビリテーションへの連携 473-477
- 31) 寺崎修司、脳卒中地域連携パスの有用性と今後の展望、479-484
- 32) 福岡大学病院地域連携室編、私のカルテが治療、福岡大学病院地域連携室、2006
- 33) 日本リハビリテーション医学会、脳卒中リハビリテーション地域連携パスに関する指針  
[http://www.jarm.or.jp/wp-content/uploads/file/member/member\\_news\\_JJRM-47-420-442.pdf](http://www.jarm.or.jp/wp-content/uploads/file/member/member_news_JJRM-47-420-442.pdf)
- 34) 福岡市、福岡県の脳卒中地域連携  
<http://www.city.fukuoka.med.or.jp/jouhousitsu/report124.html>
- 35) 大阪府豊能域脳卒中ノート  
<http://www.pref.osaka.jp/toyonakahoken/toyonokeniki/index/html>
- 36) 石川県加賀脳卒中地域連携パス  
<http://www.nouge.net/passhp/index/index.html>
- 37) 東京都脳卒中在宅生活ノート  
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp>
- 38) 印旛脳卒中地域連携パス  
<http://www.nms.ac.jp/ni/inclips/>
- 39) 京都府脳卒中地域連携パス  
<http://www.pref.kyoto.jp/rehabili/1225848113940.html>